

腹 候

腹部の見ようは呼吸の腹候応ずるを候うべし。急変のある病人は呼吸の応じよう、おだやかならず。次に動悸を候うべし。素問に云う「胃の大絡を名づけて虚里と曰う。膈を貫き肺を絡ひ、左の乳下に出づ。其の動衣に応ずるは脈の宗気なり」(其の動衣に応ずるの四字、馬玄台曰く、衍字なり。下文にて考えるに衍ならん)とあり、此の虚里の動甚だせわしく、高く手にあたるは悪証にて、猶更妊者などには甚だ忌むことなり。産後急証発することあり。又下文に「其の動衣に応ずるは宗気泄れるなり」とあるにて味わいみるべし。

去りながら世に黄胖と云う病は此の動甚だ高し。必ず悪証に非ず、勘弁すべし。是も偶記(『叢桂偶記』)に論じたり。さて詳らかなることは黄胖にて語るべし。又此の虚里の動ばかりにてかぎ(限)らず、腹部の動悸へ心を付けて候うべし。動悸に変があれば何病にても油断はならず、急変をなすことあり。小児は驚を発すること多し。又何ぞ痼疾のある人の動悸は常にかわ(変)ることもあるべし。是等は猶更に問・切と望・聞とを参伍して候^{うかがい}得るべし。

大小建中柴胡湯の類(大小の建中湯と、大小の柴胡湯の意味)、皆腹より方を付けるものなれば、腹候を油断すべからず。

腹の一体を候うの法は、腹の皮厚く肉ゆったりとして、肥人の股の如く皮と肉との分からぬを善とす。腹の皮薄くてうるおい(潤い)なく、肉と皮との離れて幾つと云うかず(数)もなく、筋の見えるは悪ししとす。腹勢を診すると云うは柔らかならず、こわからず、呼吸の応おだ(穩)やかに何れの処を按じて痛みこたえることのなきを、腹勢の良きとは云うなり。

腹の皮が薄く肉と離れて背につき肉は引っ張って、縫箔屋のわくに掛けたる絹の如くになりたるは津液のなき人の腹なり。癰囊・吐瀉・虚脱の人にあるものなり。極めて津液の尽きる腹は、皮浮き立ちて羽をむしりたる鳥の胸を撫でるが如し、極虚の凶候とす。此の手ざわりは、自汗強く死に近き人の、手足の肌にも有るものなり。又死人の肌を撫でて覚ゆべし。又多産の婦、腹皮肉にはな(離)れて浮きたるは常態なり。津液を以て見分け(る)べし。心下より痞鞭して板を按ずる如くに指も受け付けぬは難治多し。然れども甚だ怒りなどして鬱したる人、腹も斯の如くなることあり、是は難治ならず。又皮の離れて底の引

っ張って、板の如く立筋多く見えて、任脈凹にてあるもの悪候にて勞瘵に多し。引っ張る故、呼吸せわしく脈も数なるものなり。臍下ドフドフと力無きは虚腹なり。

さて其の力の無き臍下を按じてみれば、沈んで動か（ぬ）塊がある、夫れを強く按ぜば臍の四方は勿論、五体へ響いて堪え難く痛むは虚なり。臍下はたわいもなきほど力なくとも、少しも按ぜば痛あり、これも虚に属す。関元・気海辺は大切を救う穴処になりてあるも理なり。総て上腹は大いにして瘦せ、下腹は力なく処々に動気ありて、面色紅なる所なくば大病を催す候なり、むざとは療治ならず。長病の人、動悸へ手を当てても痛甚だかたきは極虚なり、難治なり。動悸の静なるは大病にても急死は無きものなり。

肥人の腹の形、胸肋よりムックリと高く、下腹に至るほど大きく軟なる腹あり。又心下はすきて下腹大きなは、皆是を佳き腹と云う。瘦人の腹は胸肋より低く、小腹まで同じ形にて按ずるに軟なるは佳き腹なり。以上の腹は皆腹皮厚く、肉に離れずして潤いあり、動悸もなきものなり。

小児は心下高めにて少腹小なるものなり。人々腹形悪きと云えども、是は小児の常態なり。形は此の如くなることを先ず心得て腹候するに、病の半ばより腹形変じて背につき削りて去りたる如くに、胸肋よりは板の如くになりて横骨の所にて段々に高くなること悪候なり。疫にも痢にも一二日のうちに此の如くなること多し。難治となす。動悸など表れて至って悪しく見えるまで知らずにはすまず。此の如くならぬ前より腹診に熟すると、勢いの脱するは知る故、早く難治を極めて明に治すべし。五臓の積を分けて名もあれども（肝は肥氣、心は伏梁、脾は痞氣、肺は息賁、腎は奔豚とあり）必ず拘ること非ず。古方家にて腹に拘攣こうれんと云うことを、芍薬の症（証）なりと口癖にする。是は伏梁と指すものなるべし。大概是乳下の通りよりつけねの処まで引き張り、臂ひじのようにある者、梁うつはりを伏せたる如くに見ゆると云う義なるべし。観臍の時、彼の伏梁と云うべきものを、段々と皮肉を割りて見れば、衆筋引きしまり聚まりたるにて、皮を割るに従ってみなみな緩みて異なるもの有るを見ず。皮の上よりは塊の如くに手にさわりて見えけるなり。拘急の腹は甘草、大棗、又芍薬の験ある処なり。夫れにて急痛せば小建中湯の主る所なり。奔豚は腎積なりとあれども、動悸の上へ打ち上げるの形をたとえたるにて、其の動の甚だしきは、呼吸促逼し或いは昏眩するに至る。又驚に発することもあり。必ず腎積とばかり一筋に心得ては、医学者の療治の下手になると云う処へあたる。『金匱要略』に其の病を四つありと云いてある。此の説解しかねれども、驚悸有りと云うものなどは頗る知るべし。『千金方』などにも奔豚と云うこと処々に出たり。猶委細は「積聚」の処にて語るべし。

何ほど脈数にて熱強く見ゆるとも、腹候して腹に熱のなきは押付けおっつけ（そのうち）さめる表熱なり。さて腹候のとき、手の平へチリチリと熱勢の見えるは伏したる熱にて容易にさ

めず。わけて小児の暴熱するは甚だ見わけかねる。ひきつけも有るべきや、どれほどのことにならんやと覺つかなく、脈にては知れかねるものなり。ことごとく腹候にて決知すべし。心下の真中^{まんなか}に動悸もありて、手掌へチリチリと応ずるは油断すべからず。

水腫にもせよ脚氣にもせよ心下に水氣の見えぬは大事なし。心下から水氣を催したれば油断はならぬ。病家へとくと云いきかせて療治せよ。わけても水腫は外見がよく見えるもの故、急変を知らずにいたると悪く唱えらるる。心下に蓄水ありて呼吸せわしきは急變の処に気を付け（る）べし。さて又水腫の証に咳嗽があるも、腹の動氣強きも、脈に数のあるも悪証なり。脚氣の衝心は心下と動氣と呼吸と脈にて決知すべし。

虫積の候は心下にあり。内がやわ（柔）らかにてムックリと高く手を当ててみれば、どこともなく脹るようにて脹るにもあらず。掌の下にこ（凝）るかと言う気味にあるものなり。此の腹の人は虫積の外候備わりてあるものなり。外候の詳らかなることは「虫積」の時に語るべし。

腹の痞を按ぜば、水面に物を浮きたるようにて手に随いて移る。下して取れるものなりと思ふべからず。見える時もあり、又隠れる時もあり、全く塊もあり、又腸の脂膜切れて浮かみ出て、手にて按ぜばたわいもなく隠れる。皆悪候なり。脂膜の切れたることは「疝」の時に告ぐべし。又臍下に堅塊の処々へまわることあり。是はさして（原文は指して）かまいにならぬこともあるべし。悪くすると小便不利することあり、転胞の因になるあり。詳しくは其の時語らん。急の人、肋骨の動いて^{あおぐ}扇如くなるもの悪候なり。急變あるもの多し。心下の真中に細（く）動悸のありて鳩尾へ打ち昇る人は快寝することならず。腹気上へばかり引きあ（上）げる故なり。彼の奔豚の意味あり。酸棗仁湯の茯苓の味、考え知るべし。さて積持ちの夜寝られんと云うは、空腹になるほど気がすんで寝られぬものなり。元來病（み）しき故に食の塩梅も常ならざれば、空腹になりたると意もつかぬものなり。其の大概をみて、是には臨臥に軽き茶漬けなどを食せしめると睡りを催す。腹気がじっと落ち着く故なり。

又小児の遺溺^{ねしやうべん}するも腹気引き上がりて少腹の空虚になる故、遺弱するなり。大人も長夜になると度々小便に起きるは下冷する故なり、と云っておけれども、是も腹気の引き上げる故なり。臨臥に餅か厚味の魚鳥の類を食すれば、其の夜起きず。小児の遺溺も厚味の食にて其の夜は止むものなり。是腹中実して腹気の引き上げぬ故なり。淡味にては早く消化する故、深更に至れば、睡中に空腹になりて腹の引き上がる故に頻数は止まず。又早起して直に朝食を食することのならぬ人あり。是も積氣のある人なり。寝口故に食のならぬと云えども、睡中に空腹になりて腹気引き上がりて積氣の動く故、食事にくし。昼も空腹をこらえ過ぎて、却って食事のならぬことあるものなり。やはり此の意味なり。静かに朝茶にても飲み、起歩する内に腹気も緩み食事となる。終夜食せぬもの故、睡中に飢え

ゆるの理は諸の治療に考え合わせて助けになること多し。誰々も積持ちなれども、夜は快寝、或いは早起きしても食のなるなどと一概に云う人とは談することならず。人の性によりて消化の厚薄もあり、大食すれば翌朝の飯は待ちかねるほど空腹になるを、昨夜腹を食い広げたる故なりと云うことあり。是は飽食にて睡中に空腹にならず、腹気実して醒める故に翌朝よきほどの腹の塩梅故、飯のうまく食えるなり。

さて又動悸あれば上づりに成るものと知るべし。上逆して耳のドンドンと鳴ると云うなどは、やはり動脈の耳中にて打つ響きなり。心下の悸ある人は眩暈するものなり。凡^{つぐ}上にて書き物して、俄に立ち上がれば昏倒するは肩のつかえたるもあれども、先ずは動悸の急に立ち上がりたる故に、一際^{ひととき}激しく心下に逼りたるなり。早く心下を按ぜば昏倒せず。子玄子の禁暈術の意を解すべし。又奔豚気の味も知るべし。心下に言ぶんのあるは、多くは気を塞ぐ故に、或いは立ちくらみなどして、気を失うこともあり、苓桂朮甘湯の意味知るべし。

腸癰は腹候にて決するものなり。臍下少腹の辺に塊ありて、指も付けることならぬ程痛み、皮膚甲錯すると潤いなくサラサラとなりて腹痛はげ（激）しく腹内雷鳴して、徳利より水にてもこぼす如くの音もあり。又杓にて水汲みかえす如くの音のするは是膿を作したるなり。さて指を付けても痛むと云うもの、常に積にもあれども、腫物の膿を持つと云う処へさわるものなれば、痛む様子も按じた処もわかるものなり。半産に多し。産後と食傷の後、腹痛するは油断すべからず、度々ある病気なり。膿血を下してから腸癰なりと云ては医者の見識はなきなり。猶詳らかなることは「腸癰」の時に語らん。

塊物を下す事至って手際の入ることなり。又大事のことなり。大概は下らぬものなり。又自ら下ることはあるべし。塊物の臍以上にあるは益^{ますます}くだ（下）り難し。婦人の塊下りやすし。撃っても攻めても動かぬ塊は必ず強く長戦はならず、命までを攻め殺すなり。大積・大聚は侵すべからずと古も言えり。夫れ故害をなさずば大概はこらえて無理に療治すべからず。

妊娠の見ようは腹候第一なり。子玄子の『産論』並びに『産論翼』に詳らかなれども、賀川家に親炙して学ぶべし。委しくは猶「婦人」の病論に詳らかに語らん。さて心得の一条は、病にての経閉は不順の至り、瘀血の為すことなれば腹にも云分あるべきに、腹候に心にかかるほどの悪候もなく常に不順にもなき、経水の滞りたらば妊娠なりと知るべし。ニヵ月目にては知れかねるも多し。又崩漏・脱血の後、娠むこと『産論』にもある通り、時々あることなれば心を用いて兼日のことを尋問して参伍すべし。

常に腹の鳴りて下りやすき人、動悸もありて胸膈に痞えて心下うるさく、気を塞ぎ、肋骨の下通りを按ぜば腰の方へ響くは疝気なり。さて疝積はいろいろの証に見ゆるものなり。

気を塞ぐ人は気を付けて参伍すべし。疝積多し。旧腹痛も旧痢も水腫にも疝を療じて功を得ること数々有り、疝は人々にあるものと知るべし。

手足の不自由か、引きつるなどの類は皆腹に根本の塊物あるものなり。左にあれば左悪しく右にあれば右悪しし。必ず手足へ目を付けては治せず、腹部にて病根を除くべし。中風は全く此の因より発す故に、名義は『叢桂偶記』に詳らかにすれば読みて知るべし。中風の腹より発すると云うことは『素問』に「岐伯曰く病、伏梁と名づく、此れ風根なり」とあるは即ち此の意味なり。

水腫の腹満したるに臍の凸に出ることあり、凶候なり。腹満・鼓脹にも凸出することあり。臍を按じてみれば、あちらこちらへ移るなり、又悪候なり。また小児の啼泣するもの凸出するは、その啼泣するの因を極めて夫れをさえ治せば臍は低くなるものなり。夫れ故小児には凶候とせず。

水腫にも脚気は猶更心下より水気を催すもの故に、心下を候えば未病を治すと云うほどに早く知るなり。是は数人を見て、指下に水気の手ざわりを覚えるを第一の要とす。腹は衣被の中にて候いするもの故、眼（に）みるべからず、又腹の水気、初起は按じたる跡は皮下につくのみにて、手足の様にありありと窪くは見えず。此の事を知りて候すべし。

婦人は肌に手のつくことを嫌う故、医も亦是を憚りて衣を隔てて候するときは知ること能わず。高貴の人は猶更此の行いありて腹候自由ならず。故に弃胎などには甚だ誤ることあり。左右に報して衣を隔てずに候すべし。又初起の時、脚脛の内通りの骨上を按じて其の跡を指にて撫でれば、肉に指跡窪んであるなり。目にて見ゆるまで知らずにては医と云わんや。手馴れるれば指を下せば手ざわりにて知るなり、撫でて見るに及ばず。然れども初心にては知れざるものなり。精神を用いて診候すべし。暗夜に脈を診しても寸口に水気をもちたる肌は手ざわりにて知るものなり。白日には三指の跡、三部に窪んで見えるもの故、病者の手を引き込むのとき心をつけて見つけて用に立ちたることも数々なり。